



# 情に厚く社員に愛された 熱気あふれる“鉛の大将”

たけだ いのすけ  
竹田 伊之助 (1890~1970年)



## 株式会社 大阪鉛錫精錬所

本社所在地：大阪府大阪市西淀川区佃5-6-45 従業員数：90名 資本金：4,650万円  
創業：1919(大正8)年4月 設立：1947(昭和22)年7月21日  
事業内容：鉛の再生精錬並びに加工売買、非鉄金属合金の製造加工売買など

## 「井澤の太閤」と呼ばれた青年

日本初の衆議院議員選挙が行われた1890(明治23)年、竹田伊之助は尼崎にあった網本の7人兄弟の三男として生を受けた。伊之助は幼くして父と長兄を亡くしており、また次兄も病気がちであったことから、家族を助けるために12~3歳で大阪の金物商・井澤金属へ丁稚奉公に出ることとなった。

どの業界も当時の奉公というのは、今とは比べものにならないほど厳しく、早朝からの掃除に始まり、様々な使い走りや雑用に追われた。そんな多忙な毎日を送る伊之助だったが、商売に対して非常に貪欲で、誰に言われるでもなく『盗んで学ぶ』姿勢で修業に励んだ結果、20代後半で会社の番頭格にまで出世し、「井澤金属の太閤」と呼ばれるなど商売人として名を馳せる人物になっていた。

1917(大正6)年、伊之助は27歳の若さで独立すると、その眼差しをまず海外に向け、上海に商社「泰三洋行」を設立して海外での商機を模索した。また、日本国内では後の(株)大阪鉛錫精錬所のルーツとなる「竹田伊之助商店」を1919(大正8)年に設立し、大阪市浪速区桜川で再生鉛(故鉛)の集荷・精錬事業をスタートさせた。当時、日本の鉛の自給率は5%程度で、消費に対して圧倒的に供給が追い付いていなかっただけに、創業時から竹田伊之助商店の再生鉛への引き合いは多く、業容は順調に拡大していった。

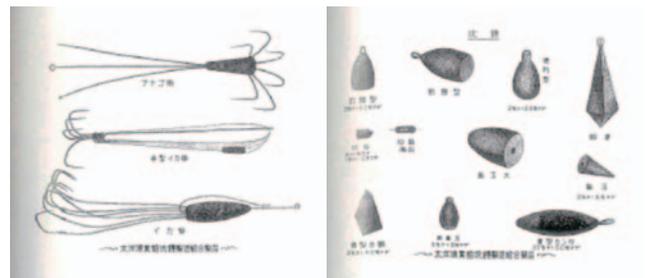


海外視察中の伊之助(左から2番目)

## 社員と共に汗を流して

社長としての伊之助の働き方は、丁稚奉公時代と変わりなく猛烈そのものだった。日中は自転車で取引先を走り回り、雨の日は工場に入り社員と一緒に作業し、会計や事務処理は日が沈んでからこなし、それに加えて非常に筆まめであったことから、取引先や友人・知人に対して、深夜遅くまで手紙を書くことも日常だった。(株)大阪鉛錫精錬所の50周年誌の中には、会社に住み込みで働いていた社員のコメントとして「(社長である伊之助が遅くまで会社に残って働いているものだから)居眠りを堪えるのに苦勞し、早く隣の宅に返って貰うのを心待ちにした」との記述が残っている。

そうした猛烈な働きぶり、商売人としての慧眼によって、竹田伊之助商店は昭和初期の世界的な大恐慌の中でも堅調に業績を伸ばし続け、1935(昭和10)年には現在の本社の場所となる大阪市西淀川区佃に第2工場を建設することとなった。



### 当時の製品カタログ

表紙を見ると、漁業協同組合向けの仕掛けや重りに関する内容であることがわかる

## 配給統制下で重責を担う

ところが、昭和10年代に入ると鉛を取り巻く状況は悪化の一途を辿った。硫酸工業の隆盛期を迎えたことから、鉛そのものへの需要は高まっていたものの、1935（昭和10）年の第二次エチオピア戦争、1937（昭和12）年の日中戦争の余波を受け、輸入為替管理の一環から「銅、鉛、錫など配給統制規則」が施行され鉛不足が深刻化すると、追い打ちをかけるように各国が鉛を含む非鉄金属の輸出引き締めを行い、1941（昭和16）年には日本への鉛の輸入が完全に途絶する事態となった。

再生鉛を扱う竹田伊之助商店には、これまで以上に引き合いが舞い込むようになったが、「会社の業績が伸びる」という喜びよりも「当社が再生鉛を作らなければ日本という国に大きな損害を与えることになる」という重圧の方が遥かに大きく、新設した第二工場もフル稼働して増え続ける需要に対応していった。しかし、太平洋戦争の幕開けとともに統制はますます強化されていき、全国民を上げての「金属回収運動」が展開されると、他の金属同様に鉛も国の重要物資に指定され、国営の組織下で管理が行われることとなった。伊之助は国の命令のもと、竹田伊之助商店に同業数社を組み入れて「大阪鉛錫精製施設組合」を設立し、代表に就任することとなった。

## 終戦と「大阪鉛錫」の再スタート

1945（昭和20）年、空襲により桜川の本社・工場が焼失したものの、同社の社員は一人のケガ人もなく終戦を迎えた。だが、焼け野原と化した大阪は、水道が断絶し、夜は電灯もなく真っ暗でひっそりとしており、かつての商都の面影なく街全体が茫然自失の状態であった。戦火を逃れた佃の第二工場も、到底営業できる状態ではなかった。しかし一方で、鉛の需要は戦中と変わらず高く、工場の再開を望む声が各所から届いていた。約半年間の休業の後に工場の営業を再開させた伊之助は、旺盛な復興需要に対応するために再び精力的に仕事に励んでいった。

1946（昭和21）年、混乱の最中、一部棚上げされてきた戦中の様々な規制や統制も正式に効力を失い、国の主導で設立された「大阪鉛錫精製施設組合」も解散されることとなった。そうした中で、伊之助は組織を改編し「㈱大阪鉛錫精錬所」を設立し、戦後の新しい時代に向けた一歩を踏み出し始めた。1947（昭和22）年7月21日のことであった。

## 大きな爪痕を残したジェーン台風

大きな転換期を迎えることとなったのは、1950（昭和25）年の朝鮮戦争勃発に伴う特需景気の頃だった。米軍からの受注や輸出の拡大で、国内の鉛価格は12万円/t程度から、一気に40万円/tにまで暴騰。また、会社としての売上も、設立当初200万円程度だったものが1950（昭和25）年には4億615万円を記録するまでに急伸した。もちろん、社会全体の物価上昇に底上げされた側面はあるものの、大阪鉛錫精錬所は当時のインフレ率を遥かに上回る急成長を遂げることとなった。

しかし、好調な時期はいつまでも続くものではない。1950（昭和25）年9月3日正午頃、フル稼働を続けていた各工場を台風が襲ったのだった。「ジェーン」と名付けられた台風は、その強烈な風で四国・近畿・東海・北陸・北海道を縦断し、各地に多大な被害をもたらした。当時は天気予報の精度もまだまだで、また当日の朝が晴天だったことから台風上陸を住民も予想しておらず、対策も後手に回った結果、多くの死傷者・建物の倒壊、その他事故が発生する事態となった。大阪鉛錫精錬所の工場も浸水し、製品・設備・鉛を溶かす炉などが水没するなど大きな被害を受けた。また、被災から2週間経っても水が引かず、引いてからも電気設備の大幅な修理・入れ替えなど、復旧に多大な時間を要することとなった。



活版印刷の際に使用されていた活字

戦後すぐの頃、輪転機向け活字などが旺盛な需要を見せ、画像の活字を組み合わせた鉛板の注文が激増した。



ジェーン台風通過直後の西淀川区

## モータリゼーションと試練の時代へ

シ ーン台風の被害はあったものの、旺盛な鉛需要の後押しもあり、大阪錫鉛精錬所は被害前の水準へと業績を取り戻していった。昭和30年代に入ると、個人向けの自動車販売が加速度的に拡大し、バッテリーメーカー各社も車載用鉛蓄電池の生産を拡大。1958（昭和33）年には10,600t程度だった蓄電池向け鉛需要が、1962（昭和37）年には37,900tにまで爆発的な伸びを見せ、大阪錫鉛精錬所の販売量は10年で3倍にまで増加していった。

しかし一方で、深刻だったのは相場における鉛価格の暴落であった。昭和30年代後半には、大阪錫鉛精錬所も鉛蓄電池の生産拡大で販売量こそ増えていったものの、鉛相場の低迷を受け、売上は横ばいしないし若干の減少を余儀なくされる試練の時期を迎えていた。また、同業他社の中には、この状況に耐えうる体力を持っていなかった会社もあり、「鉛はもはや斜陽金属だ」という声すら上がるような状況だった。だが、良い時が長く続かないように、悪い時も永遠ではない。低迷していた鉛価格も1963（昭和38）年には底を打ち上昇に転じると、翌年のオリンピックを見据えた建設ラッシュにより景気が急速に回復していった。



1961（昭和36）年の元旦、会社食堂にて（中央が伊之助）



黄綬褒章受章当日の伊之助（自宅前にて夫人と共に）

## 功成り名遂げて…

うした追い風により、大阪錫鉛精錬所の経営も完全に復調し、資本金も1,120万円に増資するなど、再び成長期を迎えることとなった。

以降、1970（昭和45）年には尼崎工場を設立、現在は超硬工具の再生という極めて高度なリサイクル技術をもって業界をリードする存在となっているほか、2011（平成23）年には大阪市此花区に西島工場を設立し、業界でトップクラスの純度を実現したフォアナイン（99.99%）の再生新鉛を中心に、徹底した環境対策を施した鉛リサイクルの先端工場として各種合金鉛の製造を行っている。

伊之助は、1963（昭和38）年4月に業界初となる黄綬褒章を受章した。会社の業績が立ち直り始めた良い流れの中での吉報であった。その後、いざなぎ景気が続く1969（昭和44）年、80歳で社長の座を辞し、さらなる会社の飛躍を後進に預け会長へと退いた。

日本中が大阪万博の熱気に包まれ、海外でも「経済大国・日本」が確固たる地位を築きつつあった翌1970（昭和45）年6月、激動の人生を歩んできた竹田伊之助は、病氣療養中に静かに息を引き取った。丁稚から始まり、経営者として会社を守り抜き、波乱万丈の商売の世界から身を引いて、第二の人生がこれから始まるという矢先のことであった。「まさに功成り名遂げてのことで、仕事に全身全霊を傾けてきた伊之助に相応しい最後だった」と後の大阪錫鉛精錬所『五十年のあゆみ』には綴られている。過日、本社で執り行われた社葬では、厳しくも温かみある伊之助の姿を想い、涙する社員たちで溢れていた。

鉛一筋に60年、会社のことを想い、社員を愛し、愛された男の魂は、これからも大阪錫鉛精錬所に宿り、同社の発展を見守り続けていく。



2011（平成23）年に竣工した西島事業所（大阪市此花区）

最新の製造設備とともに、環境対策を徹底した鉛リサイクルの先端のモデル工場を目指すほか、使用済バッテリー回収システムの構築にも取り組んでいる。